

平成 30 年 6 月 6 日現在

機関番号：12102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K16758

研究課題名(和文)分散形態論を用いた日本語の時・法と語性の形式的研究

研究課題名(英文)A Distributed Morphology Study of Tense, Modal, and Wordhood in Japanese

研究代表者

田川 拓海(TAGAWA, Takumi)

筑波大学・人文社会系・助教

研究者番号：20634447

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、1) 定性の観点から見たル形の研究、2) 語性を中心にした語形成の研究、の2つに分けられる。1については、選言等位節を対象に述語の形態は同じル形であってもその節は様々な大きさの統語構造を持っていることを詳細かつ具体的に示した。2については、これまで研究の少なかった外来語動名詞と比較することによって、漢語動名詞の振る舞いの差異が形態的複雑性とは直接関係しないこと、外来語動名詞と漢語動名詞の自他の分布が異なることを明らかにした。さらに理論的な貢献としては、接頭辞「小/大」の副詞修飾的解釈の分析を通して分散形態論で仮定されるRootの実在性とその性質を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study proposes a formal approach to tense, modal, and wordhood and their morphosyntactic natures in Japanese by using Distributed Morphology, which gives a sophisticated morpheme-based morphological model and syntactic solutions. The main achievements are as follows: 1) there are complex relations between infinitive or non-past form and syntactic structure even in disjunctive coordination clauses, 2) a contrastive study of foreign verbal nouns and Sino-Japanese verbal nouns reveals that a relation between morphological complexity and syntactic structure, and wordhood is not simple, 3) an analysis of adverbial prefixes proves the existence of Root in Distributed Morphology.

研究分野：理論言語学(形態論)

キーワード：時制 動詞の活用 動名詞 語種 形態的複雑性 語性 格 分散形態論

1. 研究開始当初の背景

「語(word)」とは何か」という問いは、日本語の研究において避けては通れない重要な問いであった。一般言語学的にも「語」の性質の解明が重要な課題であることはたびたび指摘されてきている。一方でこれは大変難しい問題でもあり、その後の日本語学の研究、また生成文法統語論を用いた日本語研究でも「語」を直接対象とした形態統語論的研究をひとまず棚上げにしておくことによって、文法・意味研究の爆発的發展を実現させたという研究史的背景がある。しかし理論言語学も日本語の記述研究も大きく発展をとげた現在、再び形態の分布を中心として日本語における形と意味の関連という問題に取り組み基盤が整ってきたと言える。

特に、分散形態論 (Distributed Morphology) という現在国際的、精力的に研究が進められている形態理論によって新たな発展がもたらされており、本研究代表者も日本語の活用・語形成に対する形式的な研究を蓄積してきた。

2. 研究の目的

本研究は、形式的(formal)な形態論研究を中心に据え、日本語における時(テンス・アスペクト)、法(モダリティ)の統語的・形態的・意味的特性の追求を通して、日本語における語性(wordhood)を経験的・理論的に解明できる研究モデルの構築を目的とする。具体的には、1) 分散形態論(Distributed Morphology)という新しい形態統語論を用いて、2) 時と法は様々な統語構造を形成するが対応する活用形は単純な形態規則によって具現し、具現する形態の語性は統語的局所性(locality)によって規定されること、を明らかにする。

3. 研究の方法

1) まず不定形であることが指摘される動詞のル形が生起する文法環境について先行研究および記述の整理を行う。その上で、2) それらの文法環境が具体的にどのような統語構造を持っており、時制句(TP)および「定性(finiteness)」を担う FinP の投射の存在と素性の値がどのようになっているのか、動作主主格句の存在、モダリティ副詞の生起等のテストを用いて個別に検証する。具体的には、選言等位節、ト節、さまざまなモダリティ形式の補文といった環境を対象とする。

さらに、形態的複雑性と語としてのまとまりの関係、語と句の境界が問題になる語形成の現象を対象に記述の整理を行い、分散形態論において提唱されている、Root という要素を核にして統語計算及び形態操作によって語が形成されるという分析が有用であることを示す。具体的には、接頭辞とその解釈、形容詞句の「する」による動詞句化、動名詞を取り上げる。

4. 研究成果

個別の言語現象に関する研究成果は下記の通りである。

- (1) 現代日本語(共通語)において、「か」による選言等位構造の第一等位節に述語動詞がル形を取るが統語的には時制句が現れない文法環境が存在することを生成文法統語論の観点から明らかにした。これは「か」の第一等位節に生起するル形に、1) 節内に時制句(TP)は存在するがテンスの対立がないもの、2) 節内に時制句そのものが存在しないものの二つのタイプが存在するというを示している。
- (2) 現代日本語(共通語)における文末の「だ」が生起できない文法環境について、モダリティ形式との共起を中心に詳細な記述を行い、統語論的分析を行った。文末の「だ」は従来繫辞あるいは判定詞であると分析されてきたが、本研究ではその両方の性質を持つと分析した。具体的には「だ」がモダリティ形式と共起できないのは、各モダリティ形式の補文内の環境と「だ」が持つ時制の素性が衝突するケースと、判定に関わる素性が衝突するケースがあることを示した。
- (3) 現代日本語(共通語)における動名詞と共起する「する」と「させる」の現れ方について、分散形態論による分析を提示した。具体的には、他動詞タイプには「する」を付けるだけで他動詞として用いることができるのは、その動名詞部分に他動性を担う統語範疇が含まれているからであることを示した。さらに、その分析の妥当性を、外来語系の動名詞を用いて検証し、形態的複雑性と統語構造及び語性の関係が単純ではないことを明らかにした。また、外来語を対象にした文法研究の有用性・重要性を具体的に示し、新たな基本的記述(外来語動名詞の自他)を提示したという貢献もある。
- (4) 現代日本語(共通語)における「形容詞ク形+する」という形を持つ句には、多くの形容詞において可能な状態変化動詞句を形成する「状態変化タイプ」の他に、特定の形容詞に限って可能になる、動作動詞句を形成する「動作タイプ」が存在することを示し、事象の限界性、生産性、項の現れ方の3つの観点から記述を行った。さらに、動詞句の意味的性質による違いとは別に、テイル形でのみ可能になる「テイルタイプ」があることを明らかにした。
- (5) 日本語研究において従来不可能な格の組み合わせであると言われてきた他動詞可能文における二-ヲパターンに限られた環境、あるいは特定の条件において確実に立ち、例外とは考えられないことを多くの用例と母語話者への内省調査を元に明らかにした。さらに、その

容認性を向上させる条件が二格およびヲ格の出現を支える一般的なものと同一であることを示した。

- (6) 接頭辞「大 (oo-)」「小 (ko-)」が動詞に付加した場合に様態修飾解釈, 結果修飾解釈, 量修飾解釈の3タイプの解釈が得られることを明らかにし, その分布が分散形態論において語の核となる要素であると仮定される Root に意味論的なタイプを設定することで分析できることを示した。

改めて理論的な成果についてまとめると, 分散形態論研究において重要かつ議論のある概念である Root の実在性と分析における有効性を具体的に示したこと, 語性と形態的複雑性との関係は単純ではなく, 統語的局所性による分析の有効を示したこと, 語種に関する情報および関連する異なる語彙群について積極的に研究することが形態統語論的研究において有用なだけでなく必須とさえ言えることを具体的な研究を通して示したことが特に挙げられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者, 研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 4 件)

1. 石田尊・田川拓海 (2018) 「他動詞可能文における例外的格パターンの出現 主格保持の原則をめくって」『日本語文法』18(1), 20-28. 査読有り
2. 田川拓海 (2017) 「接頭辞「小/大」の副詞修飾的解釈と Root 仮説」『文藝・言語研究』72: 83-97. 査読有り
3. 田川拓海 (2017) 「動作動詞句を形成する「形容詞ク形+する」」『文藝・言語研究』71, 169-181. 査読有り
4. 田川拓海 (2015) 「「だ」とモダリティ形式の非共起」『文藝・言語研究 言語篇』64, 81-95. 査読有り

[学会発表](計 14 件)

1. 田川拓海 (2018) 「分散形態論における語種の取り扱いと接辞の具現」関西言語学会 第 43 回大会 (甲南大学 (兵庫県神戸市), 2018 年 6 月 10 日)。
2. 田川拓海 (2018) 「否定表現における形式と意味の対応」大東文化大学言語学プロジェクト (大東文化大学 (東京都新宿区), 2018 年 2 月 8 日)。
3. Tagawa, Takumi (2017) “Adjectival participles and AspP in Japanese,” Workshop on Theoretical Linguistics: Syntax and its Interfaces, University of Tsukuba Tokyo Campus (Bunkyo City, Tokyo, Japan), 2017/09/24.
4. Tagawa, Takumi (2017) “Loanword Verbal Nouns in Japanese,” Tsukuba Morphology Meeting 2017, University

of Tsukuba (Tsukuba, Ibaraki, Japan), 2017/06/26.

5. 石田尊・田川拓海 (2017) 「可能文の格パターンと他動性再考」ワークショップ「日本語統語論研究の広がり 理論と記述の相互関係」(筑波大学東京キャンパス (東京都文京区), 2017 年 3 月 27 日)。
6. 田川拓海 (2017) 「外来語動名詞の形態統語研究に向けて 範疇, 語種, 形態構造」国立国語研究所シンポジウム「日本語文法研究のフロンティア 形態論・意味論・統語論を中心に」(キャンパスプラザ京都 (京都府京都市), 2017 年 3 月 11 日)。
7. 田川拓海 (2017) 「否定の統語論・意味論と日本語の研究」言語学プロジェクト第 2 回 (大東文化大学 (東京都新宿区), 2017 年 2 月 1 日)。
8. 田川拓海 (2016) 「形態理論としての分散形態論 (3): Homonymy & Synonymy」形態理論研究会第 3 回 (早稲田大学 (東京都新宿区), 2016 年 11 月 19 日)。
9. 田川拓海 (2016) 「形態理論としての分散形態論 (2): ゼロ形態」形態理論研究会第 2 回 (早稲田大学 (東京都新宿区), 2016 年 3 月 28 日)。
10. 田川拓海 (2016) 「形態の処理から見る形態論のモデル」現代日本語文法研究会第 12 回大会 (筑波大学東京キャンパス (東京都文京区), 2016 年 2 月 16 日)。
11. 田川拓海 (2015) 「周縁部の周縁部と形態の分布: FinP, ForceP と屈折, 終助詞」日本英語学会第 33 回大会 (関西外国語大学 (大阪府枚方市), 2015 年 11 月 21 日)。
12. 田川拓海 (2015) 「形態理論としての分散形態論 (1): 融合と補充」形態理論研究会第 1 回 (早稲田大学 (東京都新宿区), 2015 年 10 月 17 日)。
13. 田川拓海 (2015) 「理論的形態論と形態的構成の処理」実験言語学会第 8 回大会 (筑波大学 (茨城県つくば市), 2015 年 8 月 8 日)。
14. 田川拓海 (2015) 「愚痴命令文と命令文の構成的分析」福岡言語学会 (福岡大学 (福岡県福岡市), 2015 年 7 月 18 日)。

[図書](計 2 件)

1. 田川拓海 (印刷中) 「不定(形)としてのル形と「か」選言等位節」庵功雄・田川拓海 (編) 『テンス・アスペクト研究を問い直す 第 1 巻 「する」』ひつじ書房. 分担著
2. 田川拓海 (2016) 「動名詞の構造と「する」「させる」の分布 漢語と外来語の比較」庵功雄・佐藤琢三・中俣尚己 (編) 『日本語文法研究のフロンティア』, 1-10, くろしお出版. 分担著

6 . 研究組織

(1)研究代表者

田川 拓海 (TAGAWA, Takumi)

筑波大学・人文社会系・助教

研究者番号 : 20634447